本を選ぶ

高校図書館版

NO. 4　1987年(昭和62年)11月10日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

本　社（〒162）東京都新宿区下宮比町15 飯田橋ハイタウン518 TEL 03-235-6168

ぶっく・えんど

巡回販売の精神

出版社による学校図書館向けの巡回販売がスタートしたのは、昭和31年の４月のことであった。

これは主として、自社で出版した小、中学校向けの、いわゆる児童図書と教育書を車に積んで、全国各地の図書館を、その土地の書店さんとともに巡回し展示して、受注をうけるものであった。

この販売方式が始められたのは、私が岩崎書店に入社して間もなく、昭和31年の４月のことで、当時、岩崎では池田弥三郎、金田一京助先生らによる「日本人の生活全集」と題する、今日でいうところの民俗学、文化人類学、社会学の観点に立脚した新シリーズの刊行に大わらわであった。

したがって宣伝も、「朝日」に全頁広告を出稿するなど、並なみならぬ力の入れようであったが、結果はどうしたことか努力の甲斐もなく、販売成績は惨憺たるものであった。そこで社として、「朝日」の全頁広告へと投入した予算で、いっそのこと車を購入し、現物見本を積んで全国行脚の旅へ出かけようということになった。昭和31年の春のことで、これが今日でも出版界で続けられている巡回販売の嚆矢であり、私がその一番バッターとなった。

巡回の当初は、全国の図書館のどこへ行っても珍しがられ、歓迎されたものだった。校長室で校長さんがみずからお茶を入れて下さったり、その間、全校の生徒たちが学年ごとにメモを片手に、見本を順ぐりに見てまわり、図書の選択をしてくれたり、ともかくわざわざ東京から見本をたくさん持って来てくれた、ということで歓迎されないところはまずなかった。図書の選択も立派な授業の一環であり、とくに本に不自由していた地方の学校図書館では、それはきわめて重要視されたことだった。

私たち版元側からしても、この巡回販売はたんなる売上げの向上のみならず、思わぬ効果をもたらした。読者である図書館の先生方の出版社に対する率直なご意見、ご提案などが、ナマのかたちで頂けたことであった。これ以後、造本、装幀について、内容について、企画について、全国各地の先生方から頂いたご意見の数々は、そのご注文の売上げ以上に、貴重であり、一出版社を通して出版文化として生かされていった事を考えれば、その大切さははかり知れないものがあった。

いま、私たちは日本ライブラリー出版会（旧称は高校図書出版会）のもとに、10社が集い、巡回販売をはじめ、ブックサービス友の会などに、このような精神を生かし、さらに切磋琢磨すべく日夜はげんでいる。私たち出版社にとって、つねに読者（図書館）の強力な物心両面にわたるご支援を頂くことほど、重要なことはなく、またこれなくしては、恒常的に良書を生みだしていこうとする、各社の出版活動も、まずは成り立たない、と思うのである。

（佐藤文夫：岩崎美術社）

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

活かされる図書館を求めて

須田千代子

こんなに沢山の良い本がある、一人でも多くの生徒に利用して貰うにはどうしたら良いのだろうか。どんなに良い本が沢山あっても利用されなければ宝の持ちぐされです。毎年増える本の受入作業をしながら毎日こんなことを思い続けています。そこで活かされる図書館を目指して色々な手段を講じています。

3年前、本校の生徒1350名を対象として読書に関する実態調査をしました。これで見ると、1カ月間に1～5冊読むと答えた者が55%あり、活字離れといわれていますがまずはほっとしました。（だがこれは図書館を利用しているのではなく、自分で購入した物を読むという傾向が多いようです。このことは入学時の生徒に対するアンケートにもあらわれており、図書館は知っているが、中の本は古く堅苦しい物ばかりで面白くないという固定観念があり、室内も暗くて入りにくいという感覚的なものも作用しているようです。）しかし逆に、1年男子に限って見ると、1冊も読まないと答えた者が49%もありこの数字は重視しなければならないものと思います。これと同時に帰宅してからの余暇利用についても調査をしました。これから解ることは、テレビ・レコード等から情報を簡単に受ける受動的な姿勢であり、時間をかけ、自ら本を読む事により考えるという主体性はない、と言う事です。この結果に基づき、生徒の読書量の増加、積極的な図書館利用の呼び掛け方法を考えていくことにしました。

読書好きだが図書館を利用しない生徒達に図書館を利用しやすくしてやるには、図書館利用のオリエンテーションをきちんと行うことが大切だと思います。入学時に1クラス1時間を使い、図書館への印象を強めるため、未完成ながら、図書委員達が作った10分ほどのビデオを利用し説明していきます。このビデオは、バックに音楽が流れ、テンポもよく、図書館の実態を確認しながら進めてゆけるので、ただ司書が説明するよりも好評のようです。そこでより良いビデオづくりが今後の課題となってくると思います。

次に、PR活動の充実ということで、情報をより早く提供するということを心がける事が大切だと思います。そこで、ポスターの作成、月刊ライブラリー通信（これは、図書館の行事、お知らせ、新着図書案内、クイズ、統計等を盛り込みます）年2回の図書館便りなどを図書委員と共に毎回頭をひねってより魅力のある物を作り上げ発行しています。

さらに行事として、秋の読書週間に合わせ、11月1日より9日まで「図書館フェアー」を開催しています。これは、読書会や製本講習会、貸出し者へのしおりのプレゼント、購入希望調査等を集中的に実施します。この間はいつもの倍の利用者があり、図書館が年間で一番活気づいている時でもあります。これらの情報を人づてに聞き、図書館をおとずれる生徒は次第に増えています。

次に、読書嫌いの生徒には、本が読み易い環境を作ってやるということが必要と思います。そこで一昨年、学校長の理解もあり、図書館前の廊下を利用して、ブラウジングルームを作りました。これは、ジュウタンを敷き長椅子を置きくつろげる場所と雰囲気を作ったのです。始め生徒達は、病院の待ち合い室みたいだと騒いでいましたが、今では、気軽に利用出来るのがいいのか、女生徒などは、絵本を互いに読み聞かせ合ったりして、色々に利用しています。こうして、本に親しみ、次第に図書館を利用するようになっていってくれると思います。

さらに積極的な図書館利用については、各教科との連携が必要になってくると思います。教科との協力に基づいて、基本図書の充実、選書活動の強化を図り、教科からの要望（ブックリストやコーナーの設置等）に応えてゆくことにより、図書館での資料を利用しての授業が多くなってきました。それにより使い方の解らない生徒も、授業で図書館を使うので、通う回数も増えてきました。

私は、「どうしたら、図書館が活性化するのか」というテーマを追い求め、色々な方々のお話を参考としてその答えを見つけ出してゆきたいと思います。何かしらの道しるべをいただきたく、ここに意見を述べさせていただきました。

（千葉県立船橋芝山高校司書）

★

★★

司書５年目で思うこと

―生徒とのかかわりを中心に―

石黒順子

私が、高校の司書になってから、５年が過ぎようとしている。新設校に新任で赴任して、選書をはじめ、図書館の運営を一人で0からやらねばならなかった当初の頃の意気込みは、今になってみると、なつかしく思い出される。

埼玉県では、小・中学校には、残念ながらほとんど司書が配置されていないが、県立高校には、定時制と養護学校を除いて、全校に司書が置かれている。私の赴任した高校は、昭和50年代の新設校ラッシュともいえる時代の後半にできた高校で、男女共学の普通科高校である。図書館は、特別教室棟の５階にあった。

何もなかった新設校で、選書にあたって考えてきたこと、利用者である生徒を見ていて気づいたこと、初めの頃と今では、どのように考えが変ってきたかなどを、述べてみたい。

着任当初は、出入りの書店が、見つくろった本が1000冊入っていた。それは、生徒に利用されそうな本ということで、広辞苑から、スヌーピーまで割と変化に富んでいて、こういう感じの本をいれればよいのかなと思ったものだ。自分の卒業した高校を思いうかべても、古い本が多かった感じがするし、これからの新しい高校の図書館といっても、なかなかイメージがつかめなかった。そこで、ずいぶん近隣の学校を見学させてもらったり、先輩の司書の方に話を聞かせていただいた。

はじめは、やはり、ＳＬＡの学校図書館基本図書目録をもとにして、基本的な文学全集、百科事典といったものに、予算を費した。しかし、実際に利用者である生徒は、そんなところから選ばれた本には、見向きもしないのであった。マスコミの影響をもろに受けてきている彼らは、テレビ・映画の原作物、テレビに出ている人の書いたものに喜んでとびつく。しかし、長く読みつがれているものも、高校生には読んでほしいということで基本図書を中心に、ベストセラーとロングセラーを混ぜていく線で本を集めた。はじめは気づかなかったが、多くの人に読みつがれてきた漱石や太宰の作品など、めだたないが、確実に貸出があることがわかってきた。生徒には、国語の教科書やどこかで耳にはさんだ有名作品に触れてみたいという欲求があるようだ。また、ロングセラーにはやはり人を魅きつける力があるのだろう。

予算は、新設校への補助もあって割に恵まれていたが、年に1800～2000冊と本が増えていった。

文庫本は、やはり一番借出しが多い本である。手軽なのが、重い本を家まで持って帰りたくない生徒にも人気がある。しかし、紛失・盗難が多いのも事実である。利用の多さを考えれば、仕方のないことなのであろうか。

また、大きな本でもビジュアルな本は人気がある。写真もしくは絵が多くて、食後の昼休みに来てパラパラめくって内容がわかるような物が好まれている。字ばかりの本は、敬遠される傾向があるようで、私も同じ内容の本なら、絵や写真の多いものを選ぶようになった。

先生方、他の職員にも希望図書を聞いているが概して、教員は、専門的な本を求めるようだ。しかし、せっかく購入しても、忙しいのか、図書館が不便な場所にあるからか、あまり利用されない。宣伝・サービスが足りないのだろうか？

マンガについては、定評のある『火の鳥』（手塚治虫著）『はだしのゲン』（中沢啓治著）を入れた。寄贈で、『カムイ伝』（白土三平著）『アドルフに告ぐ』（手塚治虫著）も入った。本に無関心な利用者の目をひくのには効果があったが、マンガを読む子の中に、何故か何度もくりかえしてマンガしか読まない子がいるのに気づいた。それをきっかけにして、図書館の別な本を手にとる子はよいのだが、何人かはボロボロになるまで、同じマンガを読んでいる。幼児の頃から、マンガと教科書以外の活字の本には触れてこなかったということだろうか？　そして、マンガは人気があるし、手軽に思われるのか、紛失も多い。私自身マンガは優れたメディアだと思うし、楽しんでもいるが、図書館では、もう寄贈以外は、これ以上

マンガを入れようとは考えなくなった。

活字の本で、今一番人気があるのは、赤川次郎・氷室冴子・新井素子である。これらの本も、はじめは、あまり入れるつもりはなかった。一時的なブームですぐにすたれてしまうものだと思ったからである。ところが、毎年新入生が入って来ても、皆よろこんで借りていく。テレビや映画の原作として、知名度が高いこともちろんだが、ヤングアダルトと呼ばれる中・高校生たちの生活感覚と、ぴったりときている作品なのだろう。また読書の幅を広げていく、一つの過程であり段階でもあるようだ。

例えば、新井素子の作品の多くは、いつも元気でチャレンジをしていく女の子が主人公で、一人称のおしゃべり言葉で物語が展開される。私などにとっては、なんだかものたりないような感じがしてしまうが、それは、私がもうその年令や段階を過ぎてしまったからだろう。中・高校生の年令で、現実とたたかっている女の子・男の子たちにとって、ちょうどよい読み物となっているのだろう。これで、活字を追う楽しさをおぼえていく生徒がかなりいる。

この御三家と、その似た傾向の作家に、いつまでもとどまっている子もいる。が、あきたらなくなって「他にもっと面白い本ない？」と聞いてきた子に、「こんな本もあるわよ」と適切な本を示すのが、司書の重要な仕事であり、力量が試される時であろう。もちろん、手助けなしに自分の興味ある世界を見つけだしてくる子もいるが、私のすすめた本を、「とっても面白かった」といって返しに来る子の顔を見る時は、司書の冥利につきるという気持ちになる。生徒たちには、様々な世界やいろいろな人生のことを知って考えるようになってほしい。そのためにも、多様なジャンルの本に目を通し、自己研修しなければと思う。

また、昨年、読書に関する全校アンケートというものを行った。その中で、読書の目的についても調べたのだが、本校の生徒に限っていえば、読書は、教養や知識のためというより、楽しみのためという志向がはっきりと現われていた。読書に対する意見の選択の結果を見ても、読書は否定されているわけではない。が、「知識や教養の宝庫」だとは思っていても、「読まないとバカになる」「楽しくて時間を忘れる」という程でもないようだ。ただ、女子に「別の世界につれていってもらえる」と感じて読む子が多いのは、注目された。

確かに、「楽しみのために」読書する人が多いのは、それはそれでいいのであるが、図書館には、学習・研究のための本も忘れるわけにはいかない。最近は、学術的に内容は高度でも、高校生向きにかなり解り易く書かれた本が多く出ている。こういう本は、なかなか手に取られないのが実情なのであるが、宿題やレポート、授業で図書館を使うことによって、もっと学問的、専門的な本に触れて欲しいと思う。ただ、実際のところ、自分で必要な本を使って、ものを調べてまとめるということには、不慣れな子が多い。そういう勉強をしたことがないともいえる。でも、図書館を使えば、いろいろな情報が得られるということは、多くの生徒に知って欲しい。それは、自分の興味を持ったことについて探究していくという、生涯学習の姿勢にもつながるだろう。

特に、図書館で図書館にある資料を使った授業というのは、図書館を使いこなしていく力を身につけるのに有効だと思われる。図書館での授業というと、複本や評価の問題、授業形態の変化に対するしりごみなどがあって、それほど一般化されていない。しかし、課題を分散させたグループ学習などにして成功させている例が県内にいくつもある。

うちの学校でも、先日、一年生の現代社会で、グループ別に好きな国家を選んで調べるという授業を、図書館で行った。事前に、教科担任と司書が打ち合わせをしたり、資料を整えたりという準備をしたが、生徒は、予想外に熱心にレポートをまとめていた。また、そのクラスの他の本の貸出も増えた。こういう事例をもっと増やしたい。

最後に、蔵書数は１万冊に近づいてきたが、これからの展望として、もっと具体的なニーズに応じられる図書館にしていかねばならないと思う。学校の中の図書館であるから、授業はもちろん、修学旅行・文化祭・芸術鑑賞などの学校行事に積極的に対応していきたい。また、今あるレファレンスに応えるとともに、潜在的な利用も掘り起こしてゆく必要がある。

今は、このようなことを感じているが、これから社会もどんどん変化するし、生徒数も減少する。５年10年と仕事を続けるうち、私の考え方も、どのように変わっていくだろうか？

（埼玉県立越谷東高校司書）

★★★

あの頃、そしてあの頃……

末次牧子

高校の頃の記念写真を見ると、あのころの気分がはっきりとよみがえる。無表情、文字通り斜めにカメラをにらむ目、「なによ、なんか文句あるの！」と言ってしまえば可愛いのだが、思っているだけなのでますますこわく、今の私なら声をかけるのも遠慮したい雰囲気である。

今考えると、自分自身が何をしたいのか、将来何をやりたいのかがまるで見えてこない、にもかかわらず、勉強は当然の課題として与えられ、大学に入りたいのならここまでおいでとばかりに受験用のクラス分けが行なわれる……そんな状態で笑ってられるか！　という気持だったのだと思う。私も人並に幼い恋をしたり、友人に悩みをうちあけたり、グループサウンズに狂ったりしながらその時期をこえてきたわけだが、あの頃一番自分自身にもどれる場所は、深夜放送の流れる自分の部屋と学校の図書室だった。

私の通った高校（都立駒場）の図書室は、教室とは離れた別棟にあり、学校の中の小さな別世界であった。小・中・高と図書委員ばかりやっていた私にとってはどの図書室もなじみの場所だったが、最も入り浸っていたのは高校時代である。

頼りになるがおせっかいではない司書の先生がいて、いつも笑顔でむかえてくれた。先生の方から話しかけてくることはあまりないが、こちらが話しかけると簡潔明瞭にこたえて下さり、あまのじゃくな年頃の私はかえっていろいろなおしゃべりをしたような記憶がある。

本は少なくて全集のようなものが主であったと思うが、ベストセラーやそのころはやりの本は公共図書館（小学校高学年から、梅ケ丘図書館に通いつめていた。）、一人の作家がいいなと思ったら高校の図書室でと使い分けていたので、それほど不自由は感じなかった。図書室の本で読んだ時の気持までおぼえているのは、『クローニン全集』『チボー家の人々』『ボーヴォワール選集』、いずれも課題図書とは無縁であったが、よく読まれていたとみえてボロボロになっていた。

ある日、生物の先生（50才をすぎていたと思うが、私はひそかにその先生にあこがれていた）が、図書室で古代の日本について話をするからききたい人は集まれと言う。その先生の授業は変わっていて、ある時はいろいろな写真をならべてこれは何か考えろといって１時間考えさせたり（それはミミズの断面図だったり、月の光だったり、学校の前の歩道橋の階段だったりするのだ。）、また研修でドイツに行ったときの話だけで授業を終わったりした。その頃は気がつかなかったが、その先生が魅力的だったのは、少しもりきんでいないのに、生き生きとしていて楽しそうだったせいかもしれない。その先生を見ていると、生きているのもそう悪くなさそうだなと思えた。

さて、その図書室での講演会（?）は放課後、集まった先生方や生徒たちを前にして、リラックスした雰囲気の中で行なわれた。たしか内容は、大和はどこにあったのかという生物とはまったく関係のない話だったと思うが、その中で今でも心の指針として残っている言葉がある。

「何でも、きまりきったように思えることでも、まわりが全員そう思っていることでも、一度は疑って見てください。まったくつまらなそうなことが思いがけず面白かったり、今までどうしてもわからなかったことがその前提を疑ってみることで急にわかったりしますから。生徒のみなさんには特に、定義や計算式をおぼえるだけではなく、うたがってみることの大切さを知ってほしいと思います。」

“大人のきたなさ”とか“受験勉強のくだらなさ”という決まり文句に浸っていた私にとって、この言葉はかなり新鮮で、浸っている場合じゃないのかもしれないと思うきっかけになったようだ。

私はこういう会が図書室で開かれたということがすてきだなあ、と思う。何も有名人をよんで大きな講堂でやる必要はないのだ。ただいつもの教室とはちがったスペースで、ちがった種類の話をききたい、そんな願いに図書室はぴったりだった。

あれは誰のアイデアだったのだろう。

15年たった今でも実感として思い出せるほど私にとって高校時代は重苦しい時代だった。(表向きはそんなことは認めず軽いことばかり言っていたが) 今の子供たちは悩まなくなったとか軽くてまじめな話ができないとか言われているようだが、私の勤めている公共図書館にレコードや赤川次郎や新井素子を借りにくる高校生たちを見ていると決してそんなことはないと思う。何かに、誰かに、風穴をあけてほしいという声なき声がきこえてくるように思える。

(厚木市立図書館司書)

よ	は
く	に

ひとたび活字中毒にかかると、それはかなり進行性の症状を呈するらしく、まさに読み漁るというにふさわしい。とりわけ高校生の頃に顕著にみられるのは今も昔も変わらないらしい。更にその症状が高ずれば、本人にそんな意識があるかどうか知らないが、はたからみればまるで本の世界に唯一救いを見い出そうとする求道者のおもむきとなる。私にもひとしなみ高校生の時代があったが、重症患者である二人の同級生がいた。双方とも月に10冊以上、年間150冊のペースで文字通り濫読屋だった。ひとりはそれがもとで視神経を冒され、医者から活字厳禁の憂き目にあった。もうひとりは、おかしな話に聞こえるかも知れないが、読書家であることが災いして遂に原級の苦杯を味わうこととなった。クラスが違ってからも読みながら校庭を歩く彼をちょくちょく見掛けたから、さほどこたえていないのだと思い秘かに安どしたことが記憶に残っている。本が読めない一夏を苦悶のうちに過した片方も、秋には図書館でいつも同じ席を温めていた。しかし後遺症をわずかに残した。

二人が読書によってつまずきながらも深い傷を残さなかったのは、二人にとって本こそすべてという思い違いがなかったからだと思われる。一方は大のサッカー好き、授業中でさえ片足をボールの上にのせていた。もうひとりは馬術部員として、早朝の厩舎清掃を日課の始まりとしていた。二人とも青白き文学少年ではなかった。そして文学だけが読書ではないことを早々に両者とも心得ていた。症状は良性だったのだ。いま、ひとりは銀行員、もうひとりは消息を聞かない。

彼らとともに脳裏に浮かぶのは、図書館の司書。定年間近だったようだ。放課後よく野球やピンポンで遊んだことの方が記憶に深い。面白い本があったらボクにも教えてほしい、が口グセだった。今はもうこの世にいない。

高校の3年間など人の一生からすればけっして長いわけではない。なのにあの頃の出会い、思いのひとつひとつが一層さわやかに浮んでくる。(お)

DMかたろぐ

良寛の書の世界

小島 正芳 著

B5判／上製　定価3,500円

燿変の書とも呼ばれる良寛の筆墨はどう形成されたか。手本の変遷と書風の変化を克明に辿った画期的研究！

㈱恒文社　〒101東京都千代田区三崎町3-10-10　☎03(238)0181　振替・東京5-35824

世界科学者事典

D・アボット編　日本語版監修＝伊東俊太郎

全6巻／別巻(総索31)定価各9500円(別巻8000円)

人間を通して科学を知る事典――伝記から業績のアウトラインまでが分かる、初の分野別人名事典

1生物学者 中村禎里監訳　5数学者 齋藤正彦監訳
2化学者 竹内敬人監訳　6技術者&発明家 坂本賢三監訳
3天文学者 小尾信彌監訳　7総索31(別巻)
4物理学者 渡辺正雄監訳

世界古代遺跡地図

J・ホークス著　桜井清彦監訳

世界の170以上の著名な遺跡を、2色刷のすぐれた図版(平面図、断面図、復元図)で描く名著　定価15000円

世界考古学地図　ホワイトハウス/蔵持不三也訳　12000円

原書房　〒160 東京都新宿区新宿1-25-13 ☎03(354)0374

日本文化の源泉
珠玉の中国古典を新しい視点で読む！

鑑賞 中国の古典

小川環樹／本田 済 監修　全二十四巻

第1回配本＝11月
② 論語　加地伸行
宇佐美一博
湯浅邦弘

第2回配本＝12月
④ 老子・荘子

体裁■四六判・上製函入／各巻平均四〇〇ページ
定価■二、八〇〇円

角川書店
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
☎03(238)8521(営)/振替東京3-195208

東京書籍 文京区本駒込6-14-9 ☎03-942-4111

名著『佛教語大辞典』の図説版！
仏教・インド文化の抽象的な概念・思想を写真や図版で具体的に表現！

図説仏教語大辞典

中村 元 編著

63年1月刊行予定　予約受付中！

B5判・継表紙上製本・ケース入り・本文七〇〇頁
(約一九〇〇項目・図版約三〇〇〇点)・カラー口絵四八頁
定価二二、〇〇〇円●特別定価一〇、〇〇〇円(63年6月末迄)

化石の科学

日本古生物学会＝編　B5判144頁 定価6800円

生物学ハンドブック

太田次郎ほか8氏＝編　A5判550頁 定価15000円

原典科学史 —近代から現代まで—

常石・廣政＝編　A5判248頁 定価2900円

朝倉書店 東京都新宿区新小川町6-29
〒162　☎03—260—0141

既刊300点突破！—辞典づくり40余年—
定評ある東京堂の辞典シリーズ

●おすすめしたい必備図書

北村孝一編　四六判・500頁・2800円
世界ことわざ辞典

森　章司編　A5判・620頁・9500円
仏教比喩例話辞典

和達清夫監修　B5判・570頁・15000円
海洋大事典

北野佐久子編　A5判・228頁・1900円
ハーブの事典

東京堂出版 〒101 東京都千代田区神田錦町3-7
☎03(233)3741　内容見本進呈

TBSブリタニカ「サウンド」シリーズ





耳の中に、犯人がいる
TBSブリタニカ ミステリー
シャーロック・ホームズ
全10巻 原作/コナン・ドイル

●6巻〜10巻
12月上旬発売
●各巻定価1,600円
各巻60分テープ1本・2話収録(但し第4・6巻のみ1話収録)
全巻イラストカード付

全国書店にて
新発売



耳で感じる、ニューズウィーク
TBSブリタニカ マガジン 英語版
Newsweek
コラムシャワー VOL.1

●定価1,600円
45分テープ1本
テキスト付
毎月1点発売予定

TBSブリタニカ
〒102東京都千代田区三番町28-1 ☎03(238)5721

松谷みよ子
現代民話考 第2期〈全3巻〉

四六判上製 各2000円

第1巻 銃後　思想弾圧・空襲・原爆 沖縄戦・引揚げ
第2巻 学校　笑いと怪談・学童疎開 学徒動員
第3巻 ラジオ・テレビ局の笑いと怪談

●現代民話考 第1期〈全5巻〉各1800円好評発売中

立風書房 〒141 東京都品川区東五反田3-6-18
TEL03(447)1191　振替・東京5-74493

わたしたちの生きる社会を考えるために——

ラディカルな日本国憲法

C・ダグラス・ラミス　加地永都子ほか訳　平和憲法がめざすのはどんな日本なのか？　私たちの行動の原則となりうる日本国憲法の精神を問う。　1500円

戦争拒否—11人の日本人

山村基毅　「戦争になったら逃げればいいさ」。でも、本当にそんなことができるのだろうか？　戦争を知らない世代が捉えた太平洋戦争のもう一つの真実。1400円

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話(255)4501

フィールド図鑑 ●第2期●

高山植物　奥田重俊解説/木原浩写真　2000円

淡水魚　川那部浩哉 監修　2000円

貝類　奥谷喬司解説/楚山勇写真　2500円

海岸動物　益田一他編　2500円/**コケ**　井上浩解説写真　2000円

かがくさろん［科学サロン改題］

季刊から隔月偶数月刊となりました。

東海大学出版会　〒160 東京都新宿区新宿3-27-4　☎(03)356-1541

●各紙書評絶賛！　生きた日本学を展開する書下しシリーズ。

シリーズ 民間日本学者

既刊■[1]小泉八雲／高木大幹著[2]石井研堂／山下恒夫著[3]出口王仁三郎／松本健一著[4]牧野富太郎／渋谷章著[5]柳宗悦／阿満利麿著[6]添田啞蟬坊・知道／木村聖哉著[7]長谷川伸／平岡正明著[8]辻まこと・父親辻潤／折原脩三著[9]今和次郎／川添登著[10]田村栄太郎／玉川信明著[11]石川三四郎／大原緑峯著[12]花田清輝／関根弘著（各1400円[3]のみ1300円）

リブロポート
東京都豊島区南池袋1-16-22☎03-983-6191

新刊

わらべはみたり…「野ばら」88曲集

—付・ゲーテ「野ばら」考—

世界各地で代々歌いつがれた「野ばら」のメロディがなんと88曲も蒐集された！

坂西八郎編　執筆／E・シャーデ／W・ズッパン　礒山雅／石橋道大／石川克知／高野茂／江崎公子

本書は、編者坂西八郎がドイツを中心にヨーロッパ各地の埋もれていた「野ばら」の、楽譜蒐集の20数年にわたる探求と研究の成果である。本書はさらにこの「野ばら」を詩と曲の両面から、又この輸入曲が「日本においてどのように受け入れられ、歌われてきたか」という点から、各専門家の考察をくわえ別冊として付した。資料として「作曲家小伝」「楽曲の演奏形態別分類」「日本語訳の野ばら」等も付す。

体裁 菊倍判（305×226ミリ）函入上製本　楽譜篇168頁　研究篇112頁（分売不可）　定価七九〇〇円　内容見本呈



岩崎美術社　東京文京本駒込3-39　電話03(824)1731

新英学辞典縮刷版

監修　大塚高信・中島文雄

本辞典は、昭和57年に新版となった『新英語学辞典』を縮刷したもの。古英語から新言語理論までの、現代英語学の到達点を示す1900余項目を収録。英語学を学ぶ、学生、研究者に必携のこの辞典を、より利用しやすい縮刷版として新たに発行。

B6小判／1582ページ／5,000円

★従来の判型のものも、引続き発行しております。

16×24cm判　1582ページ　定価18,000円

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の9　☎03(291)2301　振替東京9-32260　**研究社**

日本キリスト教歴史大事典

1988年1月20日刊行＝創立100年記念出版！
B5判／1600頁／定価45000円・特価42000円

●キリシタン・カトリック・正教・プロテスタント全教派の歴史と現状がわかる日本初の歴史事典
●日本の科学・教育・社会福祉・文化・文学などへのキリスト教の貢献のあとを実証的に跡づける。
●教派・事件・人物・教説・学校・団体・運動・1万項目
●日本の政治、宗教、文化とキリスト教の接触、衝突、相互影響のあとを歴史的実証的にたどる。
●各都道府県別のキリスト教史の概略を記述する。
●名もなき殉教者、隠れた功労者、忘れられた事件を発掘して項目にとりあげ、新しい光をあてた。
●キリスト教用語辞典を兼ね、詳細な年表を付す。

東京都中央区銀座4-5-1　**教文館**　電話(03)561 8446